

## 第1回 府立北桑田高等学校の在り方検討会議（概要）

- 1 日 時 平成28年12月19日（月）午前10時～11時45分
- 2 場 所 あうる京北 2号ゼミナール室
- 3 出席者 17名  
府教育委員会 川村指導部長、山本高校教育課長、  
中島高校改革担当課長、宮下首席総括指導主事 ほか
- 4 概 要
  - (1) あいさつ
  - (2) 報告・説明
  - (3) 意見交換（主な意見）

### ■報告・説明

□府教育委員会：資料説明

□北桑田高等学校長：学校概要について説明

- ・本校の概況だが、3年前から、「ふるさとを愛し、ふるさとを支えていく人材を育成すること」を目的として、「美山・京北町ごとキャンパス」の取組を行っている。今年度は、新たに府教育委員会から地域創生推進校の指定を受け、地元のプロジェクト活動やイベントに積極的に参加したり、文化祭の地域公開や、本日から開催する校内イルミネーション等の取組を行うことにより、地域密着型の学校を目指している。現在は、幸い大きな問題事象も発生しておらず、落ち着いた環境の下で学習活動を展開している。
- ・部活動の加入率は80%を超えており、今年度は、吹奏楽部、自転車競技部が好成績をあげている。しかし、在籍者数の減少により、団体戦のメンバーが組めない部活動も半数近く生じてきている。文化祭や体育祭などの学校行事においても同様にやりくりしに苦労している。
- ・美山分校の全校生徒は33名であるが、年々何らかの支援を要する生徒が増加しており、教職員は家庭と連携し、個に応じた丁寧な指導を心掛けている。陸上競技部や農業クラブが本年度は頑張っている。

### ■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

◇ 府教育委員会及び北桑田高校長から説明をさせていただいたことも踏まえながら意見交換をいただければと思うが、出席いただいている方からも資料を頂戴しているので、概要を説明いただきたい。

○ 本資料は、一昨年、JR西日本に京都市の「歩くまち京都推進室」と一緒に要望に行った際のものである。京都駅発、北桑田高校行きといったバス路線の延伸をお願いしたわけだが、あまり満足できる回答ではなかった。この資料をみなさんに見ていただき、こうした形が良いのであれば、本会議の軸として、一緒にJR西日本バスに出向いて要望をしたいという思いを持っている。

北桑田高校が京都市右京区にあるということも多くの方がご存じない。京都駅において、北桑田高校前行きのバスを乗り入れていただくことで、大きな宣伝にもなるのではないかと。京北として何とかこれを進めたいと願ってきた経過があるということをご承知いただきたい。なお、現在、周山から北桑田高校までの京北ふるさとバスの料金は無料になっている。

◇ 説明いただいた内容や、資料などについて御質問があれば合わせていただければと思うが、まず、北桑田高校の現状について、あるいは、中学生の進路選択について、どのようにお考えか御意見をいただきたいと思うがどうか。中学校の校長先生方、いかがか。

○ (中学生の) 進路状況については資料のとおりであるが、本校校区内に北桑田高校があるということで、地元や保護者の方の中にも卒業生が多く、北桑田高校に対して大変強い思いをみなさんお持ちである。その中で、子どもたちも、基本的には北桑田高校に行くのだと漠然とは思って過ごしており、資料にあるように、7割から8割の生徒が北桑田高校に進学しており、年度によって若干差はあるが、その率は概ね変わってない。昨年度は若干低かったが、平成29年度入試に関しては、現在のところ、8割近い子が普通科及び森林リサーチ科を希望している。

他の京都市内の地域と比較すると、他の地域(京都市・乙訓通学圏)には多くの受検できる選択肢があるが、当該地域では選択肢が限られている。例えば、嵯峨野高校の京都こすもす科や西京高校のエンタープライジング科等の専門学科を希望する生徒もいるが、普通科に関しては、基本的に全て北桑田高校を希望している。

ただ、京都市内の他地域への進学となると、先ほど北桑田高校までのバス延伸要望のこともお話いただき、バス料金についてもいろいろな取組をいただいているが、実際はかなりお金がかかる。例えば、通学定期にしてもひと月に3、4万円かかる。年間で40万円、3年間では120万円ほど必要になってくる状況の中、実際問題として他地域への進学は厳しい状態かと思う。そうしたこともあり、北桑田高校の更なる充実を求める声が大変強いというのが、本校の子どもたちや保護者の意識ではないかと感じている。

○ 本校については年々生徒数が減っている中ではあるが、約50～60%の生徒が北桑田高校に進学をしている状況である。様々な面から、公立高校への進学が非常に多く、また、普通科志向が非常に強く表れている状況である。

普通科で学ぶことはもちろんだが、加えて、例えばこんな部活動があるからこの学校に行きたいという希望もあるし、保護者の都合にもよるが、通学の利便性として、仕事に向かう保護者の車に乗って行きやすい高校を、という選択もある。北桑田高校へ通うか、園部方面に向かうかという選択をされている保護者が最近多い。道路状況もかなり変わってきたので、より便利であること以上に、保護者の費用負担の少ない方面へということも高校選択に関わっているという状況である。

○ 北桑田高校の将来を考える場合、森林リサーチ科はユニークで特色のある学科である。将来、この特色ある学科をどのように核として重視し、北桑田高校を創り直していくかが一つのポイントになると思う。そういう観点から見た場合、昨年、一昨年と美山中学校から森林リサーチ科に進学した生徒は0名であり、周山中学校からは4～6名。以前の状況に比べると少し減る傾向にある。中学生から見た場合に、森林リサーチ科はどのような受け止め方をされているのか。また、実際に入学している生徒は、どういう意識で入学してきているのか。中学校、高校双方から簡単に聞かせてほしい。

○ 今年度から赴任のためこれまでの経過はわからない点もあるが、子どもたちは地元林業については、もともと家に関わっているとか、興味を持っているという意識はあるようだ。また、北桑田高校は部活動も大変盛んなので、その面で興味を持っている子もいるかと思う。平成29年度入試についても5～6名以上の希望がある。それが、京北の地元の思いであり、子どもたちの特徴ではないかと考えている。

- 美山中学校の場合は、普通科志向が非常に強いということもあるが、何より、地域産業として森林に関わる人がかなり少なくなっているということで、森林に関わる仕事がなかなか見えにくい部分がある。子どもたちもそうだが、どちらかと言うと保護者の方たちが、仕事に就くにあたっては月給取りになってほしいという願いがある中で、森林リサーチ科を卒業した後の仕事が見えにくいと思っておられるのではないかと考えている。
- 森林リサーチ科については、地域外からの進学が4分の3を占めている。京都市内の他地域からかなり来ているわけだが、地元から来ている子については、中学校からもあったように、林業の構造不況ということがかなり影響していると危惧している。京都市内の他地域から来ている子についても、実際のところは林業を目指している子はかなり少ないと思われる。  
 そのため、第1次産業の林業から脱却して、新しく森の活用など何かできないかということで、例えば、「悠久の灯プロジェクト」では、京都の伝統産業である和蝋燭を復活させ、維持するという京都市の取組に参画し、本校では原料であるハゼの苗木を育てているところである。  
 また、「悠久の森プロジェクト」は、芦生の森が国定公園に指定されたということで、新しく森を生かした産業が何かできないかということで、美山ふるさと株式会社にお世話になり、昔の林業のイメージを脱却した教育ができないか模索しているところである。
- 4分の3程度が京都市の他地域等、地元以外から来ているということで少し驚いたのだが、どうして、地元の子どもが地元の森林リサーチ科に進まないのか、これが課題ではないかと思う。説明を聞いてこういうことが起きているということはわかったが、今後のことを考える場合には、その点を加味して議論していく必要があると考えている。  
 説明の中で、京都市内の他地域から来ている生徒も、森林リサーチ科で林業を学ぶために来ているのではなく、他の動機、端的に言えば、他校へ行くのが難しかったから森林リサーチ科に入学したといった消極的な理由で入った子どももいるのかもしれないという印象を受けた。  
 それでも、3年間専門学科で勉強することによって付加価値が付く。最初の動機としては林業をやる気ではなかったが、3年間勉強してみてやはり林業は面白いとか、やってみようと思わっていくという点についてはどのように掴んでいるのか。森林リサーチ科の卒業生の進路先が資料に書いてないのでお聞きしたい。  
 また、若者の意識も変わってきているのではないかと思う。例えば、もっと自然環境を大切にしたい仕事をしてみたいとか、自然について専門的な勉強をしたいということで、単に良い大学に入って、良い会社に就職をするという思考ではなく、本当に自分がやりたいと思うことを将来やることに価値がある。森林資源や自然などについて勉強してみようという生徒がいるのではないかと思う。全国的に見ればかなりの数になるのではないか。そういう子どもたちを、もし北桑田高校の森林リサーチ科に集めることができれば、かなり変わっていくと思う。そうした出口の付加価値のようなものについてどのように考えているのか。少なくとも森林に関心を持って、そういう価値観を持って進んでくる若者を集めることができないのか考えてみたいと思う。
- 進路先については、昨年度は、国公立大学、私立大学への進学者が11名で、非常に高い割合であった。その内訳については、林業というよりは、国公立大学の農学部環境系がほとんどである。私立大学についても、農業の環境系、中には林業ではないが、林産系も含まれている。

生徒の育て方における北桑田高校のモットーだが、普通科とは異なり、林業で人を成長させるということで、教育課程には実習科目を非常に多く置いており、最初は何となく入学した生徒についても、4つの班に分かれて、ログハウスを造ったり、岩盤緑化など様々なコースがあるので、ゆったりした環境の中で自分に適したコースで自然の中で教育を受けることによって自然観なり人生観をつかんでいっている。そこが本校の森林リサーチ科のセールスポイントかと思っている。

◇ 中学生の進路選択の際に、専門学科の取組に興味関心を持ってもらえているのかという点も課題ではないかと聞かせていただいたが、地元の方から現在の北桑田高校をどのように思っておられるか。あるいは、今後どのように発展していくことを望んでいただいているかという点についてご意見をいただきたい。

○ 現在、総務省が地方創生、地域おこしを掲げており、南丹市でも「地域おこし協力隊」として、すでに8名の若者が南丹市に来て、地域おこしに活躍しているが、そうした中で、最近、田舎に住みたいというか、田舎で何かやりたいという若い人がなんとなく増えてきているのかなと思う。農業もしたいし、林業もしたいという方がかなり増えてきていると思う。高校生や中学生の段階では、なかなか田舎の良さは分からないのだが、都会で生活をした方で、これからは地方の時代、地域の時代であると感じられる方がかなり多いのかと思っている。

その中で、移り住まれる方からすれば、例えば、子どもが小学校になり中学校になり高校になるという時に、地域に高校がないとなると、その地域に住んで子どもを育てようという気が少し下がってしまうのかなと思う。そういう意味では、高校がきちんと地方にあり、高校を中心にその地域が振興されるということが非常に大切だと感じている。中学生の段階では森林に関する環境の大切さといったことは、まだ気がつかないことがあるとは思いますが、ぜひこういうユニークな学科を北桑田高校に残してもらいたいと思う。

また、先ほど部活動の話があったが、全国的にもレベルの高い自転車部があるわけだが、自転車部を目指して北桑田高校に進学される方もいるかと思うが状況はどうか。

○ 皆様のご協力で、2年前は全国制覇を成し遂げさせていただいたが、今年の1年生等については、京都府外から本校に来ている生徒は2名である。実は、鹿児島県に、町をあげて自転車部を学校の看板にして、うらやましいほどバックアップを受けている県立の大隅高校がある。町おこしの大きなテーマとして取り組んでおられるのだが、そうした高校に選手が取られたり、また、全国規模で見ると練習環境に恵まれた私学等にも中学生は進学するので、正直申しあげて少し厳しい現状がある。今後さらに頑張らなければならないとは思っているところである。

○ 町全体の活性化の視点で高校の在り方はどうなのか。今春に「口丹地域における府立高校の在り方懇話会」が開催されて以降、北桑田高校のことをしっかりと応援し、調べてもきたのだが、調べるほどに非常に良い高校だと感じている。京北には大学はなく、近郊の京都市街地に37の大学があるため、京北から一旦市街地に引越して下宿するのはやむを得ない面がある。しかし、高校がもし京北にないということになると、町の極めて深刻な衰退につながると危機感を持っている。京北地域の活性化のためにも、北桑田高校の存続は非常に大切なことだと思う。

先ほど御指摘のとおり、森林リサーチ科は大きな可能性を秘めているのではと思う。私たちが普通に使っている石油化学エネルギーが枯渇するのは間違いない。その中で、森林資源が見直されてくる時代が必ずやってくる。林業・森林課程を持っている高校は、関西でもこの北桑田高校ぐらいだが、そこで学び、育った子どもた

ちが、40、50歳になる頃、化石燃料が枯渇する時代が来る。そのときに幅広い自然資源の大切さを高校時代に身をもって体験している人が活躍する社会が来ると期待している。

森林リサーチ科から国公立大学に進学している生徒も多い。中学校時代に評定3ぐらいでも、自然環境豊かな北桑田高校で、部活動などでも目標を持って3年間しっかりと先生方に育てていただいた子が国公立大学に行けるという成果を出されている。そうした高校の現状のアピール、自転車部も含め、また、将来的な展望で言うと、森林関係、自然資源関係を学ぶ課程の学科があるということの大切さをアピールして、成長させていけば良いのではと思う。

- 府の取組として、地域の豆を使った料理コンテストを行ったところ、美山分校の農業科の男子生徒が、美山の茅葺の里のイメージのお菓子を作って優勝した。また、須知高校は、ウィードの森を活用した観光プランコンテストで優勝した。地域で学んでいる生徒たちは、大変ユニークで、地域に着目して、地域の資源を活かした取組をしている。そこが素晴らしいと思う。

北桑田高校の進路決定状況を見ると、森林リサーチ科も含め、大学、短期大学、専門学校等に進学する生徒の割合が私が思っている以上に多い。私も40年近く前に南部の府立高校に通っていた。普通科に行く生徒以外には、農業、工業、あるいはその他の学科に行く生徒もいたが、高校を出て就職するという選択をしていた方々が多かったと思う。大学や短期大学といった上級の学校で学びたいと中学生の時点で思った場合、専門学科に行くことは普通科に行くよりも、授業のカリキュラムからすると少しハンディキャップがあると思うのだが、それでも非常に割合が高い。これは、理工系の学びと言うか、「悠久の森プロジェクト」や和蠟燭といったものに着目しながら、サイエンスの芽をこの時期から培われているからこそ、大学の方もこのような能力のある生徒を求めるのかと思う。高校生に何を求めるか、すなわち、高校を卒業して就職をするという技術力をつけるのか。そうではなく大学に行く力をつけるのか。あるいは、その双方を含めた選択ができる能力を求めるのかという点を明確にする必要がある。人の数は減っていく。移住、定住、交流により人口を増やそうとはするが、オールジャパンで日本人が少なくなる中、人の取り合いをしているわけにはいかない。入学生が少なくなることで質の向上を併せて考えることは難しい。

- 先ほども話があったが、森林リサーチ科は普通科と異なり、他の地域からも生徒が来ることができるということで、自転車をしに来たりなど、必ずしも林業に興味があるからという理由ではない生徒が多いという印象はある。私の子どもが昨年度の森林リサーチ科の卒業生である。なぜ森林リサーチ科を選択したかと言うと、普通科よりも森林リサーチ科の方が補習がなく、授業が少ないので野球に打ち込めるからという理由であった。しかし、入学後、少人数で専門的な教育を受け、また、研修で海外に行く機会を得るなど、本人の興味がスムーズに入っていったというか、野球に打ち込みながらもまじめに勉強することができたので、結果として公立大学に進学できた。他の同級生を見ても、3年間、北桑田高校で教育を受けているうちに、むしろ普通科の子どもたちよりも広い選択肢が目の前に広がっているというか、国公立大学も含めて自由に進路を選択したと感じた。林業科なので、一見間口が狭く思われるが、今後はもっと広い視点で、環境教育、例えば緑化デザインや環境に即した地域経営という視点で運営していけば、もっと興味を持った子が集まってくるのではないかと感じる。

- 私も北桑田高校の卒業生の一人である。私は普通科出身で、当時は森林リサーチではなく林業科であった。当時は生徒も多く入学していたのだが、現在の状況は後

援会としても心配している。後援会の組織に「魅力ある北桑田高校を推進する協議会」を立ち上げており、PTAや同窓会、地域の方々と連携して、なんとか北桑田高校の魅力をPRしたいと考えている。

個人的には、森林リサーチ科の生徒数が減少しているのは、地域産業の変化にも大きな原因があると思う。林業がほとんど壊滅に近い状況で衰退してきた。本来、北桑田の地域は林業がメインの産業であったにもかかわらず、大きく経済情勢が変わってきた。今なお地元の林業・山林を維持し、育てていこうという先輩諸氏もおられるし、なんとか林業を育てていこうという若者もたくさんいる。行政にもお願いしたいのだが、南丹市、京都市、京都府で、地域創生でも良いのだが、いわゆる林業関連の企業を地元で誘致するような動きをとってもらうことも、北桑田高校森林リサーチ科の活性化のPRの一つの目玉になるのではないかと考えている。大変大きな問題ではあるが、私たちの組織なり、地域の組織なり、学校、一般企業の協力が必要だが、こうしたことも一つの方法かと思う。

また、先ほどおっしゃったように、実際に動きを示しておられるが、通学しやすい環境づくりが北桑田高校にとって急務ではないかと思う。南丹市美山町や京都市右京区の生徒が北桑田高校に安心して通学できる環境づくりが必要だと思う。

- 美山町の現状としては、平成28年10月1日の人口は4,035名で前年対比で130名の減である。65歳以上の高齢化率も44.7%で0.4%上昇している。しかしながら、先ほどもあったように、Iターン、Jターンは確実に増えてきている。平成28年10月1日現在の新生児は8名であるが、平成26、27年度は28年度の美山小学校の新入学児童数より、若干ではあるが増えている。そのような中、3月25日に美山町のほぼ全域が国定公園に指定された。豊かな自然や貴重な歴史、文化といったものが高く評価されての指定だと思っている。私たち美山の人間としては、このことを誇りに思い、次世代に繋いでいかなければならないと考えている。

また、府には昨年度から南丹市、亀岡市、京丹波町、綾部市といった森のある市町を中心に、「森の京都」という振興策を展開してもらっている。そうした中で、今までにない林業への風が吹いてきていると私は思っている。国定公園の関係にしる、「森の京都」関係にしる、魅力ある林業づくりに行政として取り組んでいきたいと考えている。北桑田高校森林リサーチ科も魅力ある学科だと思っているので、ぜひ行政と高校、教育関係者が協力しながら魅力ある北桑田高校をつくっていききたいと考えている。

- 在り方についての論議は今後も回を重ねて検討していくわけだが、まず、学校や府教育委員会に聞きたいのだが、定員が毎年割れているが、何名になっても北桑田高校を存続するつもりなのか。北桑田高校の森林リサーチ科は、今日まで生徒数を増やしてきた一つの科でもあるが、今後、どういう特色を持った学校としていきたいのか。

先日、危機感を感じて門川市長に相談に伺った。「北桑田高校は将来分校になるのか。それとも廃校になるのか。危機ですよ。」という話をさせてもらった。市長は、「北桑田高校は素晴らしい学校だ。森林リサーチ科も素晴らしい。」と、全国一の森林リサーチ科のある学校だということもよくご存知で、「林業の衰退等はあるが、一方で、例えば龍谷大学では今後、農学部を設置を検討されている。この大地でもう一度農業を学ぶ学科をおこしてもらおう。」「京都市としても 学校をなくすことがないよう、府とも協議して守っていききたい。」という考えを聞かせてもらった。

合わせて、美山分校は何名になっても存続するのか。様々な噂も聞こえてくるが、答えがあれば教えてほしい。

- ◆ 現時点で、必ずこうだ、と固めているものはない。まさに、これから様々な観点で検討するために、皆様方のご意見を賜っているところである。ただ、問題意識はいくつも持っている。

地域にとって、中学生から見て、そして、地域産業から見て、北桑田高校の存在は大変重要であるというご意見をいただいた。また、少ない人数の中にあっても、豊かに学んで進学を果たしているというご説明もあった。ただ、最初に校長から話があったように、これがすべてではないが、部活動で団体戦の競技ができなくなってきたということもある。より大きな学びの場の方が、子どもたちの育ちにとって良い面があると感じている。

また、学科に関しても、森林リサーチ科は大変素晴らしい努力をしていると評価していただいているが、もともとは林業家を育てる機能を果たしていたわけである。林業そのものが非常に厳しい状況にある中で、今後、発展していくことも考えられるが、林業を中心としてきた森林リサーチ科の今後の教育内容のキーワードとしては、自然や環境を学ぶというのも良いのではないかというご意見もあった。どのように舵切りをすれば良いのかと思いながら聞かせていただいた。

学校を存続させる上では、子どもを集めなければならないが、どうすればより多くの子どもたちを集めることができるかということが非常に重要な要素であるのだが、普通科と森林リサーチ科の2学科を併存できるだけの数が集められるだろうかということが課題認識としてある。通学条件も考えなければいけない。通学ができなければ寮を増やすことも考えられる。そうしたことをいろいろと検討し、新しい北桑田高校の姿を模索していくべきではないかという課題認識である。何名になっても続けるのかということについては、いろいろ手を尽くした後で考えていくことだと思っている。

それから、分校については、地元の方がほとんど進学していないという実態がある。園部や亀岡方面から遠距離通学をして分校に通っている子が多い。現在、分校は様々な課題のある子どもたちの学びの場となっているが、別の場所に移すといったことも検討しても良いのではないかという課題意識を持っている。

あくまでも課題認識であり、どうしていくかということについては、皆様方との様々な意見交換を経る中で考えていきたいと思っている。

- 府として様々な考えを持っていただいていると思うが、この検討会議で、「こういうことをやっていきたいがどうか。」という発信を考えてもらいながら進めていければと思う。

京北地域においては、小中一貫校の協議を進めており、平成32年4月に開校予定ということで大きく前に進んでいる。いろいろと問題もあったが、これを必ず押し通して、素晴らしいものにしていく。「京北にあんな素晴らしい学校ができた。」ということで、どんどん人口が増えていくのではないか。合わせて、北桑田高校に今後魅力を感じてもらおう。現在、寮を増築しているのか修繕しているのか把握はしてないが、希望者が入れないということも聞いている。例えば、一般の方が下宿をされる際の支援ということも考えてほしいと思っている。

余談になるが、1ヶ月ほど前に京都市内に向かって運転をしていたら、2人の高校生が手を挙げて、「京都へ行かれるのなら乗せてもらえませんか。」ということだったので、御室仁和寺まで乗せて行ったのだが、その子たちは森林リサーチ科の生徒であった。「あなたたちは今から進学の問題も抱えて大変だね。」と言うと、一人の男の子は、「私は大学が決まっています。」と言っていた。「どこに行くのか。」と尋ねると、「明治国際医療大学に行って、看護師になりたい。」とのことだった。

「1年生の時には、森林リサーチ科に入って惜しいことをした、京都市内の別の高校に行っておけば良かった、と思っていた。でも、今になると森林リサーチ科を選んで、こうして大学も決まって大変嬉しい。」「このことを知り合いにも伝えたい。」

というようなことを言ってくれていた。その子は寮に入っているとのことだった。また、もう一人の子は東京の方へ就職兼勉強をしに行くということで、「新たな勉強もしたい。森林リサーチ科を選んで良かった。」と言っていた。「どうしてこんな時間に帰るのか。」と聞くと、「部活動が終わったところである。実家からバスで通っている。」とのことだったので、「バス代も大変だね。」というようなことなど、いろいろな話をした。

京北の灰屋という地点から周山のバス停までふるさとバスで860円かかる。そこから京都駅までバスに乗ると1,100円程度必要で、往復すると約4,000円のバス代がかかる。これを市バス並みにしてもらえないかと京北出張所の片山所長にも同行いただいて門川市長に要望した。なんとか市バス並みに何回乗っても区間230円ぐらいにしてもらわないと、この土地の運転ができない方、様々な事情のある方が病院、学校、買い物に行くのに、かなりバスの運賃が高いのでぜひ実現してほしい。さらに、学生には半額のさらに半額というような形もとってほしいと要望を積み重ねているところである。

こうした取組により、なんとか北桑田高校を存続させ、生徒が増え、活性化するようにと一生懸命頑張っているところである。今後、府教育委員会としても「こういうことをしたいので一緒にやりましょう。」という柱を示してほしいと思っている。

◇ ご意見の中で高校に入ってから学科の良さや高校の良さがわかってくる生徒がいること、ただ、中学生段階ではなかなか良さが伝わっていない、あるいは普通科を選ぶ生徒が多いということであったが、小学校から見た高校、あるいは、小学生と高校生との関わりという辺りについてはどうか。

○ 私が着任した平成22年度の児童数は128名だったが、28年度は98名と30名減った。年々児童数の減少が続いている。先ほどもあったように、平成32年度からの小中一貫校に向け、素晴らしい学校づくりに現在邁進している。いろいろなお考えはあるが、学校づくりが町の活性化に繋がればと思っている。

そうした中、保護者の教育に対する意識も随分変わってきたのではないかと感じている。保護者の中には北桑田高校を卒業された方が多いので、自分たちも北桑田高校へ行くと思っている子どもが多くいた。また、市街地の方へ通うニーズとしては、水泳を習ったり、スポーツを目的に通う子どもが多かったが、この頃は、学習塾に行く子どもが増えてきた。学習塾へ行くということは、次の選択肢を求めておられるご家庭もあるのではないかと感じている。そのような中で、周山中学校、北桑田高校という選択肢が若干変わるのではないかと感じたりもする。やはり、部活動で自分のやりたい活動ができにくいということは課題だと思っている。

これは疑問として聞いてもらいたいのだが、通学区域について、周山中学校の子は北桑田高校に決まっている。美山中学校の子も北桑田高校に決まっている。このように通学区域が決まっていると、その母数となる子どもの数が減ってくるわけだから、北桑田高校の生徒数は当然減ってくる。外部から招聘することを考えていけないのではないか。現在、普通科の定員割れが大きな問題であり、普通科をどのようにして増やすかが大切ではないかと思っている。

私は高校3原則で育った年代なので、ここで生まれるならこの高校と決まっていたが、今はもうそういう時代ではない。どこからでも高校を選択できるようになったことは、一定評価できるのではないかと感じているのだが、この地域の子どもたちは、ある程度進路先が決まっている。他の右京区の子どもたちはなかなか北桑田高校には来にくい。学区外から合格できるのは募集定員の20%以内ということを知ったのだが、資料を見ても多くて4名しか周山中学校・美山中学校以外からは普通科を選んでいない。まず普通科を選択できる条件づくりが必要なのではないか。



次に、通学の保障と寮の整備についてだが、現在は希望する子が来られる条件がないのではないかと。通学保障は大切なことだと思うので、その課題解決が、今後、北桑田高校の生徒数を増やす道なのではないかと思っている。現在は、周山中学校に行き、北桑田高校に行くという子どもがまだまだ多いと思うのだが、今後は激減するのではないかと思っている。

- 美山小学校は、本年4月に5つの小学校が再編して誕生した学校であり、現在、児童数は135名。基本的には5小学校とも人口減少で、それぞれの学びの集団としては小さかった。しかし、現在、一番小さいクラスが11名、一番大きいクラスが34名で、子ども同士が学び合い育て合う環境になっている。それぞれの通学区域は広域化しているが、ある程度の集団の中で学び合うことが、特に小学校の段階から折り合いをつけたり、深い学びをしたりしていく中で、対話的、主体的な学びを深めつつ、他者と共存して生きていかなければならない子どもたちにとって大切な学習環境であると考えている。

昨年、北桑田高校のブラスバンド部に来てもらい音楽鑑賞を行ったが、子どもたちは素晴らしい演奏に感激していたし、また、自転車競技等も盛んな美山地域なので、自転車部も大変活躍されており、子どもたちはとても北桑田高校に興味を持っている。本校は今年から、少子化人口減少に対応した活力ある学校教育推進事業のモデル校として、文部科学省から3年間の指定を受け、地域の良さ、美山町の良さを体験的な学習を通して学んでいくこととしており、農業や畜産、林業などの現場に行ったり、地域の方に来てもらったりして学んでいる。その中で、将来の夢についても、父親の跡を継いで農業をしたい、畜産をしたいという子どももいる。

現在、美山小学校に通っている3割の子どもたちの保護者は、IターンやUターンで帰ってこられた方である。北桑田高校の素晴らしい取組がいろいろと学びの中で伝わってきているが、先ほど中学校長からもあったように、どうしても通学の利便性の問題がある。美山町で言えば、下佐々江まで行って京北方面に行くか、それとも園部方面に行くかということ、家庭の都合等もあって園部方面へ行く。そして兄弟の上の子がそちらへ通うと下の子も同じように進む現状がある。地域のことを学んで地域の良さを学ぶ、単に自然と関わるということではなく、自分が生かされているという学びをしていくことによって、保護者の影響もあり、北桑田や美山の自然の豊かさに今までとは違う価値観を持っている子どもは多くいるが、うまく北桑田高校への進学につながっていかない現状もあるのではないかと。

- 北桑田高校の生徒は、大変人間ができており、常に笑顔で、大きな声であいさつをしてくれる。学校の指導もあるが、地域の方々が常に声かけをしてくれているのでこうした生徒が育っていると感じている。寮に入っている野球部の生徒の保護者から「こんな素晴らしい自然の中で、子どもがすごく生き生きと学校生活を過ごしている。」「弟も今年、北桑田高校を受検する。」という話を聞いた。多くの保護者と話す中で、森林リサーチ科を選ぶかどうかは別にして、森林リサーチ科の生徒は入学してから学ぶ中で興味も出てくる。いろいろな体験もできるということで、非常に楽しく学校生活を送ってくれていると感じている。北桑田高校に行きたいという生徒はいるが、寮が一杯で入れないという状況の中で通ってきている生徒もいるし、諦めた生徒もいると聞いている。保護者の立場からすると、行きたいという生徒がいる以上、寮を増築するなどして、希望する学校に子どもたちが入学できる環境をつくってもらいたいと思う。今後、北桑田高校をより魅力ある学校にしていくためにどうしていくかということを考えていくべきだと思う。

私も北桑田高校出身であり、同級生の中には昔の林業科を出て、今でも京北で厳しい中で頑張ってくれている者もいる。衰退しているからどうするかではなく、森林リサーチ科では林業だけでなく、様々な事業や取組をしてもらっているので、生

徒を増やすことに力を入れてもらいたいと考えている。保護者として、OBとしても大変素晴らしい学校であると考えているので、皆様のご指導をお願いしたい。

- ご意見を聞く中で、北桑田高校の現状をどう見ていけばよいのかという一つの糸口が明らかになってきているのではないかという感想を持った。と言うのも、この5年間で北桑田高校の募集定員は20名減っている。5年前も20数名の定員割れ、今でも20名を超える定員割れとなっている。つまり、北桑田高校を志願、入学する生徒が減少している。それは何に起因するのかと言うと、北桑田高校の問題というよりも、北桑田高校を巡る今日的な様々な社会の状況が、こういう結果をもたらしている。日本全体の人口減少であったり当地域の急速な少子化であったり、また、生徒や保護者のニーズの多様化、進路希望の多様化であったり、選択の幅が相当広がってきていることなどが、外的要因となっていると受け止めることができると感じた。加えて、中学3年生の約98%が高校進学を果たしているという現状からすれば、極めて義務教育に近い後期中等教育、高等学校教育になっている。その状況を考えれば、当地域からその機会と場がなくなるということは極めて考えにくい。つまり、どんなに志望者が少なくなろうが、後期中等教育を受ける機会が必要ではないかと思っている。そういう観点で言うと、どのようにこの地域に後期中等教育の場と機会を考えていくのかというそれぞれの立場での検討が必要ではないか。先ほど高校と地域振興という観点からや高校と生徒の育ちという観点からの意見もあった。したがって、今後の地域社会の在り方、将来の地域を担う人間形成、人材育成という視点から北桑田高校の今後を考える。さらに、多様な生徒、保護者の進路希望の実現という観点からそのニーズにマッチした北桑田高校を考えていく。そういう切口で、いかに北桑田高校の存在価値を高めるかが大切ではないかと考えている。

併せて分校の問題も、地域性と広域性という観点と、分校を志望している生徒のニーズや動機、実態など、生徒の立場からの観点と両方から在り方を考えていくことが必要と感じている。

いずれにしても、北桑田高校の存在価値をどう高めていくか。このことは、みんなが当事者として考えるべきテーマだと思っている。

- それぞれの立場でそれぞれ何ができるかを主体的に考えるべきだというご意見が出ているが、正にそのとおりだと思っている。府立高校の検討の協議に京都市教育委員会が出てくることはあまりないわけだが、この間北桑田高校について調べさせていただき、本日もいろいろな話をお聞きし、とても素晴らしい学校だと思っている。そうした中で、定員割れが生じていることをどう考えていくのかという話だと思う。

失礼かもしれないが、まだ十分な力が出し切れていないという気もしている。もう少し本気になってやるべきことがまだまだできていない部分があるのではなかという思いがして仕方がない。

私は本日、JRバスで会場のあうる京北まで来たが、運賃は1,180円であった。やはり高めの金額という気がしている。たまたま、仁和寺あたりから北桑田高校の寮に入っている生徒が一人、病院に行っていたということで乗ってきて、運賃を支払っていたのだが、もうこの時間帯には周山からここに来るまでの連絡バスがなかった。私はたまたま施設の送迎バスを予約していたので、そのバスに他の方も乗ってここへ来ることができた。冒頭でお話があったバス路線の問題を目の当たりにしたなと思ったところである。

寮の問題についても、オープンキャンパスには参加するが、「寮がいっぱいで。」と言われて帰ってしまった生徒もいるという話も聞いた。まだまだ潜在的な希望者はいるのだと思う。京都市教育委員会としても、できることはしていきたいと思っているので、どういう方法が良いのか、皆様方にいろいろな意見をお聞きしながら、

また、府教育委員会と十分な連携をとりながらこの会議を進めていければと思っ  
ているので、今後ともよろしくお願ひしたい。

- 北桑田高校についての現状報告を聞かせてもらったが、極端な小規模校であり、  
高校としての機能が本当に果たしているのかどうか、という思いである。府教育委  
員会としても様々な補助的な手立てをとっておられると思うが、これから何年か先  
の生徒数をリアルに見た場合、周山中学校と美山中学校の子もたちの何割が北桑  
田高校に行くのか。そのことをベースにして考えた場合、より小規模の学校になる  
のではないか。そうなると、北桑田高校に行こうと思った京都市の他地域の生徒も  
諦めてしまうのではないか。少なくとも高校にふさわしい教育を提供する必要があるが、科目数や選択教科、習熟度別指導などの教育の質が保てなくなるのではないか。また、先ほどから出ているように、部活動もうまくいかず、それが魅力をそいでしまう。あまりにも生徒数が少ない高校は、それだけで子どもたちのやる気、元気を失ってしまう。そうしたことを考えると、放っておいては本当に自然消滅的にジリ貧になってしまうと思う。したがって、テコ入れをしていくことを急いだ方が  
良いと思う。例えば、5、6年とこの状態が続けば生徒が来なくなってしまう。それを何とかするためには、少し急いで次の手を打つということを考えた方が  
良いのではないか。それには当然この会議をどういう段取りで進めていくかということにも関わってくる。検討を急がないと本当に自然消滅的に高校が消えてしまう心配がある  
と思っっている。
- 配付資料の最終ページを見てほしい。京都府内には府立高校、京都市立高校など  
多くの高校があるが、改めて見ると、口丹地域の中でも北桑田高校以外の高校は山  
陰線沿いにあるという見方ができる。つまり、今後の少子化対策の中で、それぞ  
れの高校が魅力を発したり、合併したり、連携することができる可能性はあるのだが、  
北桑田高校は地理的にみて府内の高校の中で一番不利な地域にある。JR日吉駅から約25km、地下鉄東西線太秦天神川駅から同じく25kmと、府内の高校の中で鉄道駅から一番距離がある高校である。だからこそ、この自然の中で伸びやかな教育とい  
うか、先生が生徒としっかり向き合っ、のびのび育てる。あるいは、他の誘惑が  
あまりないということで、町の魅力、高校の魅力、環境が守られているのかもしれ  
ない。府内の高校の中で極めて状況が不利な地域の高校にも関わらず、これだけの  
成績が残せている高校として、京都府、京都市は何らかの施策を打つ必要があるの  
ではないかと思う。